

「ファリサイ派の人と徴税人の祈り」

2015年10月30日

ルカによる福音書 18章9節～14節。自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話された。「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

主イエスは、自分は正しいと自惚れ、他人を見下している人々を、譬えで話された。二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人であった。ファリサイ派の人は神殿に向かって立ち、心の中で「神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています」と祈った。一方、徴税人は神殿から遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、胸を打ちながら、一言「神様、罪人のわたしを憐れんでください」と祈った。主イエスは、こう譬えた後、「言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」と括られた。

「義とされ」ということは、神に肯定されるということである。人は自己肯定できないければ、自分の人生を受け入れることができない。誰もが自己肯定の場を必死で求めている。それが、得られずに苦悩しているのが現実である。ファリサイ派の人は他者を見下し、自らの力を誇り、神に感謝している。彼の自己肯定は、宗教的社会的に優位な立場にあることから生まれている。社会的評価に基づく自己肯定には確かさはない。

映画『白バラの祈り』で描かれた女子大生ゾフィーはナチズムを批判するピラを配り、逮捕される。過酷な尋問を受け、裁判で死刑判決が下される。その時、彼女は裁判官に向かって「今にあなたが裁かれる」と叫ぶ。時代が変われば、裁判官が被告席に座る。この映画は実話に基づいて作られ、彼女の叫びは事実となった。

ファリサイ派の人は、律法による差別管理社会の中で、自惚れ、他人を見下しているが、そこでは、神からの肯定は得られない。上から目線の彼には、困難な中で生きている人々は目に入らず、神の愛を共有して共に生きようなどとは思ってもいない。

徴税人は自己肯定からはほど遠く、自分の人生を受け入れることができない。しかし、彼は神をリアルに信じ、畏れている。その神に砕かれた信仰をもって「神様、罪人のわたしを憐れんでください」と祈った。「義なる神」の前で、自らの罪におののき、神の憐れみなしには生きられませんと告白した。主イエスは、神に肯定されたのは、ファリサイ派の人ではなく、徴税人であると語られた。主イエスの十字架と復活は、あるがままの自分を、神が「よし」と肯定してくださる福音である。社会や人からの肯定ではなく、神からの肯定を信じる者は、自らの居場所を見出すことができる。「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」という言葉は処世訓ではない。神の高さを信じて、へりくだる者が真の自己肯定に与るのである。